

27. 洗滌喀痰(気管支分泌物)中の Hemophilus の消長と臨床経過について

野本泰正, 上原すず子, 寺島 周
矢野仁子, 稲葉美佐子, 手代木儀人

洗滌喀痰(気管支分泌物)中に Hemophilus influenzae の頻回に証明された 1 症例の経過を例示し, Haemophilus が喀痰中に認められた 26 症例について検討した。

咳嗽は菌検出時には強度でないものが多く, 一方菌消失後にも殊るものがあった。喀痰は菌検出時には大部分が膿性で, 量は菌検出時に増加している。体温は 39°C の高熱は 3 例のみで, 37°C 以上のものは 4 分の 1 にすぎなかった。

胸部の聴診所見では菌検出時に 78% が有所見で, 特に湿性ラ音を聴取している。

白血球数は菌陽性時に半数が増多を示し, 菌の消失とともに正常に復している。

菌陽性時, 赤沈値の亢進が半数に認められ CRP の陽性も約 10% に認められ, 菌消失とともに正常に復した。最後に抗生物質の効果について検討を加えた。

質 問 吉田全次(順天堂大)

Hemophilus がしばしば検出される例については, 抗生剤の局所投与, すなわちネブライザーによる吸入がよろしいのではないかと思います, いかがでしょうか?

答 野本泰正

ネブライザーによる喀痰融解剤吸入も有効と考えますので, 抗生物質を吸入することはなお有効かと存じます。

追 加 上原すず子

喀痰中の Hemophilus は抗生剤によって比較的速やかに消失することが多いが, その際喀痰量の著しい減少消失がみられるので, 対症的に抗生剤が与えられた場合には, 治癒したと考えられ易い。しかし, 本菌は朝のみ 1~2 個の喀痰が数カ月ぶり認められたような場合にも, 純培養状に検出される例があり, 治療上注意する必要がある。

28. プロテウス菌性髄膜炎の一乳児例

富田 進, 海野 栄(国立水戸)

新生児期および幼若乳児期の髄膜炎は特徴的な髄膜炎症状が不明瞭なため, 早期診断の困難な場合が多い。われわれは某産科病院より転院してきた発熱を主訴とする生後 40 日の未熟児で, 入院 1 週間後に顔面および四肢の痙攣を起こしたが髄膜炎症状なく, 生後 1 カ月で漸く, 大泉門拡大膨隆, 頭囲拡大を示し, ルンバルによる髄

液所見は比較的軽度の化膿性髄膜炎所見でありながら, 大泉門硬膜下穿刺では大量の膿性髄液を排出し, プロテウス菌を証明した。

患児は恐らく分娩時, あるいは分娩後に何らかの機転でプロテウス菌の髄膜炎感染があったもので, 当初の外耳炎も関係があるものと考えられる。水頭症, 痙攣, 智能障害, 視力障害, 言語障害などの高度の後遺症を残した。

29. 特異な経過をとったレイ菌感染症の 1 幼児例

川崎 富作(日赤中央小児科)

4 才女児, 生後 10 日目より, 反覆性化膿性淋巴腺炎(主に頸部)肺炎, 口内炎, 骨髄炎などをくりかえし, 起炎菌もクレブシエラ, レイ菌, 黄色ブドウ球菌, α 型溶連菌などが証明されたが, 特に 2 才から 3 才半の約 1 年半, 全身の各所の化膿巣からレイ菌が証明された。本菌による皮内テストでは百万倍稀釈で, 小膿疱から潰瘍を形成し, 同時に今まで癒痕化していた頸部の数カ所が, 再び化膿した。常に高 γ-グロブリン血症がみられ, IgA, AgG, IgM も増加こそすれ減少はなかった。最後に化膿性肺炎が約 4 カ月増悪軽快をくりかえし, 遂に死亡した。剖検で, 全身の化膿性肉芽性慢性敗血症性病変がみられた。本例は, レイ菌感染が単なる菌交代現象によるのみならず, 何らかの免疫機構の異常ないしは欠陥を基盤として一種の反復感染症候群と考えられた。

質 問 吉田 亮

全身のリンパ節の大きさの変動と, 生検所見についてお聞きしたい。

答 川崎富作

① くりかえしみられた化膿性淋巴腺炎は一般に拇指頭大くらいになると皮膚がきわめてうすくなり, 自壊する。そのあとは, 癒痕を形成し, この状態はあたかもかつてのスクロフローゼを思わせるものがあった。

② 化膿しない淋巴腺はせいぜい小指頭大までで各所にふれ一部を生検したところ, 非特異性肉芽性慢性淋巴腺炎の像であった。

すなわち本例は, 化膿と肉芽形成の両者を併った慢性病変で, 一種の反復感染症候群と解された。

30. 最近 10 年間における東京地方小児気道感染症に関する研究

南谷 幹夫(東大分院)

1956 年より 1966 年に至る小児気道感染症 1,456 例についてウイルス学的血清学的解析で示すとともに各年度別分布, 年齢分布, 臨床診断との関係を示した。さらに